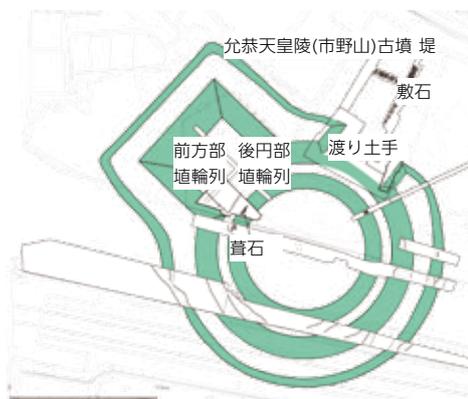


令和2年度から、唐櫃山古墳を整備するための調査を実施することになりました。唐櫃山古墳は土師ノ里駅からも近く、允恭天皇陵(市野山)古墳との近さも体感できる、絶好の古墳です。古墳の大きさや周濠の形、允恭天皇陵(市野山)古墳との関係性など、確認しなければならぬことは山積みでした。調査を始めたころは唐櫃山古墳の築造当初のイメージが大きく変わる調査になるとは思ってもいませんでした。今回は、令和2年から5年までの調査のうち、唐櫃山古墳と允恭天皇陵(市野山)古墳という主墳と陪冢の関係性がよくわかる成果をお話ししていきます。

調査成果をお話する前に、調査をおこなうまでの唐櫃山古墳について整理しておきます。まず、古墳の形は帆立貝形の前方後円墳で、2段築盛後円部が上下2段になっています(で全長は59

mと想定されています。葺石と呼ばれる古墳の斜面に積まれた石は古墳全体ではなく、前方部と後円部の上段のみで、埴輪列は後円部を廻るように立て並べられ、周濠の形は盾形、と呼ばれる形であると考えられています。允恭天皇陵(市野山)古墳の堤は2重になっていますが、外側の堤に取り付くような復元がなされていました。

令和2年度の調査では、唐櫃山古墳

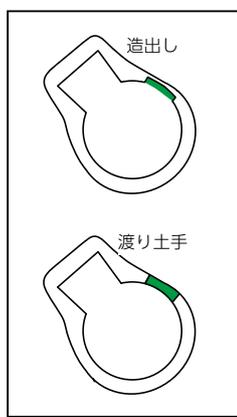


▲唐櫃山古墳復元図

の墳丘の大きさや周濠の形といった古墳本体の基礎的な情報を確認するとともに、允恭天皇陵(市野山)古墳の堤と唐櫃山古墳がどう接しているかを解明するために調査をおこないました。

調査の結果、周濠の形は盾形ではなく馬蹄状で、允恭天皇陵(市野山)古墳の内側の堤に取り付いて造られたことがわかりました。加えて、允恭天皇陵古墳の堤の上面には3〜5m程度の石が敷かれていた可能性が高いこともわかりました。また、古墳の葺石は後円部下段にはないことを追認することができました。

令和3年の調査は、墳丘の北側がどれだけ残っているのかを確認するための調査でしたが、本来埴輪が並んで見つかることのない場所で見つかり、何らかの構造物が構築されている可能性が高いことがわかりました。令和4年にも引き続き同じ場所の調査を実施した



▲唐櫃山古墳の構造物2案

唐櫃山古墳の発掘調査
～允恭天皇陵(市野山)古墳との関係～

ところ、幅13・5mの埴輪列を伴う構造物があることがわかりました。一方で允恭天皇陵(市野山)古墳までこの構造物が繋がる渡り土手になるのか、繋がらずに壇状の造出しになるのかはわかりませんが、昨年の調査で構造物が渡り土手になるという答えを得ることができました。

調査前にはわからなかったことが、今回の調査で初めて明らかにするなど、重要な成果を得ることができました。今回は、昨年の調査でわかったもう一つの成果をお話したいと思います。

(文化財保護課 泉 眞奈)